

生まれたのは「希望」

認知症になった元社長と元先生が伝えたかったこと

毎日新聞 2020年11月18日 12時00分



「今は周りに腹が立たなくなりました。老人としてちゃんと生活ができたなあと自分の頭をよしよしとできる感じがあります」と語る元社長の長谷部泰司さん＝東京都世田谷区で2020年10月8日午後0時28分、銭場裕司撮影

認知症になった本人の権利が尊重され、全ての区民が希望を持って暮らせる地域を目指す条例が、東京都世田谷区で誕生した。当事者の目線を大切にされた内容は「各自治体の先駆けになる」と高く評価

されている。検討委員会には当事者が参加して条例に魂を吹き込んだという。どのように認知症と向き合い、どんな思いでいるのか。かつて会社社長と美術の先生をそれぞれ務め、認知症とともに生きる81歳の男性と69歳の女性に会いに行った。【銭場裕司】

いらだち、怒りをぶつけた日々も

「今は老人であることに誇りを持って生活ができています。社長をやっていた時よりも充実しています」。長谷部泰司さん（81）はアパートを訪れた記者にそう語り、やわらかな笑顔を見せた。

名古屋市生まれ。自ら組み立てたラジオなどを販売した父親の電器店を手伝い、大手電機メーカーを経てスーパーマーケットを展開するニチイ（のちのマイカル）に転職した。電気製品売り場を担当し、催事の企画や運営を担う子会社・マイカル物産の社長も務めたという。まだ珍しかった100円均一の店も手がけた。

認知症の症状が表れたのは退職した後の73歳の頃だ。待ち合わせができなくなり、異変を感じた家族が1人で暮らしていた大阪のマンションを訪れると、部屋を片付けられない状態で座る場所もなかった。

次女が暮らす世田谷区に引っ越した後も安定しない日が続いた。「どうなってもいいんだ」とい
らだち、周りに怒りをぶつけることも。認知症であることを納得するまでに時間が必要だった。

「人生の中で今が最高とちゃうかな」

今も1人暮らしを続ける長谷部さんは、お金の管理を次女に任せるようになってから気が楽に
なると明かす。「できないことはやってもらう。けど、やれることは自分でやる。そうして老
人として自立することに生きがいを感じています」。洗濯は自分でこなし、日課の日記を付けると



「よくできたなあ」と自分をほめてあげられる。

「老人を代表してお礼を申し上げます」。条例の誕生を記念したシンポジウムで感謝を伝えた長谷部泰司さん＝東京都世田谷区で2020年10月25日午後3時43分、銭場裕司撮影

マイカル物産での社長時代を尋ねると、言葉があふれ出す。「部下の話聞いてやるのが仕事。子会社にやって来るのは、本社でうまくいかないまま中堅になった社員が多い。彼らをどう納得させるか。話を聞いて認めてあげるだけで、思いもよらない力を出すことがある」

長谷部さんは現在通うデイサービスでも周りの話し相手を買って出る。それが自分の仕事だと思
っているという。「同じ老人でなければ分からない事情もありますから」とにっこり笑った。

参加した条例作りでは「認知症になってもやれることはやっていく」との思いを伝えた。病気にな
るのは避けられない。けれども老人として自立する喜びはある。そんな境地に達した長谷部さん
は「生きることに希望がある。人生の中で今が最高とちゃうかなあ」とうなずいた。

ほんの少しの協力があれば……

条例作りにかかわった、さきこさんにも話を聞いた。現在69歳。4年前に定年を迎えるまで小
中高で美術講師を務めた日々を「子どもたちが可愛くて、楽しかった」と振り返る。

教え子との思い出を尋ねると目を輝かせて、話は止まらない。

「やればできるのにやらない子たちがいる。だから個別につかまえて『できるんだからやんなさい』って話すと、しょうがねえなあって顔をしながらちょっとずつやるわけ。コツが分かって『先生、うまくできた！』って来る。テストなんてできなくてもいい。自分が興味を持ってできるものを、授業で見つけさせてあげたくて……」

元美術講師のさきこさんが制作したちぎり絵の木。葉っぱにはたくさんの人のメッセージがつづられている＝東京都世田谷区で2020年10月25日午後4時39分、銭場裕司撮影

さきこさんは、もの忘れをする時はあるものの、買い物をしたり、ごはんを作ったり、日常生活は問題なく送れている。「元気すぎて困っちゃう。そこが難点なんですよ」。明るい話しぶりに接すると、生徒から好かれた先生だったんだろうなと感じる。

先生時代は、難しくない技術で、家に持ち帰ってもずっと取っておきたくするような作品を教え子たちが作れるように心がけた。定年後は、今までの経験を生かした仕事やボランティアなどに挑戦しようとしたものの、1人だけでこなすのが難しいこともある。ほんの少しの協力があればできる

ことはたくさんある――。区の条例作りではそんな思いを伝えたつもりだ。

さきこさんは「自分になってみたら結構、居場所が減りますよね。これで施設に入っちゃうと限られた人との対話しかなくなる。しばられるのは嫌なんです。なるべく周りに迷惑をかけないで、このまま生きていきたい」と語る。今は学生時代にやっていたソーシャルダンスも再開して充実した時間を送っている。別れ際には元社長の長谷部さんと同じような気持ちを口にしました。「子どもたちからたくさんのものをもらった。人生に



悔いはないし、今が一番幸せかも」

思いが込められたちぎり絵の作品

かつての認知症施策は当事者である本人たちの声をほとんど聞かずに作られてきた。だが、ここ数年は自らの思いや体験を語る本人が増え、和歌山県御坊（ごぼう）市が本人とともに作った条例を施行するなど、新たな動きが生まれている。

「認知症とともに生きる希望条例」という名前で10月1日に施行された世田谷区の条例も、施策を評価する委員会への本人参加を条文に明記するなど、本人の視点を重視する姿勢を貫いた。目指すのは、一人一人の意思と権利が尊重され、自らの力を発揮しながら安心して暮らせる地域だ。以前は認知症になると「何も分からなくなってしまう」という考え方があったが、条例は、本人の意思や感情は豊かに備わっているとして「尊厳と希望を持って自分らしく生きることが可能」とはっきり伝えている。



ケアマネジャーの鈴木章子さん（右）に、「心が軽くなってイライラしなくなっている」と笑顔で語る長谷部泰司さん＝東京都世田谷区で2020年10月8日午後0時26分、銭場裕司撮影

10月下旬に条例誕生を記念して開かれたシンポジウムには、2人も登壇した。長谷部さんはパネリストとして「条例は大きな希望になるのではないかと。老人を代表しましてお礼を申し上げます」と感謝を口にした。閉会后に感想を尋ねると「条例は非常によくできていますけど、実践に落とし込んだ時にどうなるか。中堅幹部がそれを理解してどれだけ取り組んでくれるのか、ということが重要だと思います」となめらかに語る。社長として重要な会議で役目を果たしたような、生き生きとした顔つきだった。

さきこさんも緊張した様子を見せずにマイクを握った。閉会后、条例が道しるべとなって導かれるであろう社会への期待を記者に語った。「これで目線が変わってくるのかな。もっと人として見られるようになるとうれしい。病気はいろいろあるのに、認知症だけ特別視されるのは良くないでしょ」



会場の一角には、さきこさんが依頼されて手がけた、ちぎり絵が飾られていた。不要になった包み紙をいったんしわくちゃにして伸ばした上で、クレヨンで色を塗り、白い紙にはり付けて作った木の作品だ。大人の背丈ほどあり、みずみずしい質感がある。

「ひとりじゃないよ」「一緒に楽しく」。さきこさんが作ったちぎり絵の作品は、さまざまなメッセージが書かれた葉っぱがはり付けられて完成した＝東京都世田谷区で2020年10月25日午後4時39分、銭場裕司撮影

作品を完成させたのは、認知症カフェの参加者やボランティアらがメッセージを書き込んだ葉っぱだ。「ひとりじゃないよ」「やさしい街づくりに貢献したい」。たくさんの思いがあふれてにぎやかになった木を、さきこさんは満足そうに見つめていた。

誰もが希望を持てる未来をつくる挑戦が始まっている。